

新島講座についての報告

新島講座は、創立百周年記念事業として、新島襄を記念して一九七九年から開設された事業の一つで、立学の精神を基盤として現代にふさわしい教育、研究の幅広い交流を図り、わが国の学術・文化の進展に寄与することを目的としております。

新島講座には、内外の碩学を講師として京都・同志社に招聘して開催しているものと、同志社から講師を派遣して東京に開催の場を設けているものとの二つがあります。

昨年十月七日（土）東京にて開催いたしました第十一回東京新島講座並びに十一月一日（木）、二日（金）の二日にわたり、京都・同志社にて開催いたしました第十四回新島講座講演会要旨を記述いたしました。

第十一回東京新島講座

講師 上野 瞭 同志社女子大学教授
演題 大人と子どもの間の文学

講師 小川光暘 同志社大学文学部教授
演題 日本・環太平洋のピラミッド

上野 瞭教授講演要旨

一人の大人でありながら子どもの本に関わる理由、児童文学のみならず成人文学を書く理由、教師でありながら物語・小説を書かずにはおれない理由をじぶんに問う形で話を進める。

最近作『アリスの穴の中で』（新潮社）は男性の妊娠・出産を描いたものである。それと同時に一人の老女の生涯を並行して語ったものである。TBSで放映されたドラマ



上野 瞭教授

マのほうは、この表裏一体となった異質の人生の片側、男性の妊娠・出産だけを取りあげたが、原作者としてそれがいかに不満だったか、そのことを最初に触れる。

それにしても、男性の妊娠を描くということには、どういう意味があるのか。願望としても可能性としても男性に内在しないそれが、もし実際に起りうるとしたならば、現行の社会制度、従来の価値観、秩序と呼ばれるものは混乱に陥入るのではないか。それらは一見、合理的な良識の上に成立しているように見えるが、暗黙のうちに男性

中心の論理や発想の上に成立していたからである。それは男女の性の役割を固定化した構造と呼んでもいい。

男性にしても女性にしてもその「性」は、本来、個人の選択したものではない。人間の出生に当って（人生の入口において）「性」は本質的に選択不可能なものとして存在するの、この機能の異質性を、男性中心社会では「価値観の異質性」として固定化してきたきらいがある。子種を「与える性」と「与えられる性」というように。男女の役割の異質性が、男女の社会的地位の上下性を生みだしたのは、多くは男性側の無意識に育んできた独自の価値観のせいである。従って女性解放だの男女平等だのいう問題は、半ば以上、男性のその「性意識」にかかっている。

『アリスの穴の中で』は、そうした男性の意識の問題を問うため、妊娠という女性の役割を男性に付与したものだ、発想のいま一つの因子は個人的体験である。視力喪失という重度身体障害者の義母との二十余

年にわたる同居生活が、その発想を生んでいる。

しかし、物語を書くということは、そうした人生への「問いかけ」だけだろうか。十九世紀から二十世紀初頭にかけて仕事をしたイーディス・ネズビットは『砂の妖精』（Five Children and It 1902）というすぐれた作品を残した。それがすぐれているのは、単に子どもの夢想が描かれているからではなく、人間に共通内在する願望が描かれていからである。それは「複数の人生を生きたい」という有限一回限りの人間の願望である。

物語・小説を書くということは、また、読むということは、その思いと深く関わっている。そして、わたしが教師でありながら細々と作家であり続けることもおなじ思いに根ざしている。

小川光暘教授講演要旨

ピラミッドといえばエジプトのものに限られているように思われがちだが、質量ともにエジプトに勝るとも劣らぬピラミッド

王国にはメキシコがある。メキシコ市に近い高原の古代都市テオチワカンにある太陽のピラミッドは、辺の幅が二五メートル、高さ六五メートルという壮大なものであるし同じく月のピラミッドも幅が一五〇メートル、高さ四六メートルとこれまた小山ぐらゐのピラミッドである。このような、エジプトの三大ピラミッドに匹敵するほどの大物は少ないが、数の上では中型・小型のピラミッドが無数にあつて、その実数はつかめない。

メキシコのピラミッドの特色は、正面に



小川光暘教授

頂上に達する石段が設けられていることと、頂上部が平坦になっていて祭壇さいだんの役割を荷っていることである。ところがこうした同じ特徴を備えたピラミッドがインドネシアの島々にも現存している。最もよく似たピラミッドはジャワ島中部にあるスク寺院の本殿で、その底辺は一五メートル、高さ四、三メートル。大きさではメキシコにある中クラスのものといえるが、きちつとした美しい石積みや、正面の石段、平らな頂上部を囲む祭壇のデザインなどは、メキシコでも名高いクルカンのピラミッドなどを連想させる。スク寺院から程遠ほどとおからぬ位置にあるチュート寺院の本殿も、ほぼ同規模のピラミッド型の構築物である。

ジャワ島の隣にあるバリ島でも、スルウルンという山中の寒村に四基のピラミッドが確認された。これは非常に素朴なものだが、やはり屋上に達する段と、頂上部分に神座を設ける形式など、メキシコと同じピラミッドの基本が守られていた。もつと調べていくと、ポリネシアではタヒチ島やハ

ワイ諸島など至るところにピラミッド式の石壇のあることがわかってきた。

日本にもこれに類するピラミッドが現存しており、その分布も北海道から対馬にまで及んでいる。韓国でも三基、日本のものと酷似したピラミッド式の石壇があった。

こうして、太平洋を大きくとりまく環太平洋一帯は、独特のピラミッド圏であることがわかってきた。

これらのピラミッドの多くは、それがどのような宗教祭儀さいぎの場であったのか、今のところまだはつきりとはわからない。ただ不思議なことにその多くは東の空を拜む太陽崇拜か、富士山のようなコニーデ式の火山を拜む山岳崇拜さんかくはいの色彩をのこしている。さらに不思議なことは、ピラミッド遺跡いしに付随して陰陽石、つまり男根だんこんや女陰にょいんを象る石彫が存在している。

常識的な解釈としては、作物の農穰祈願ほうじょうとか、子宝祈願こたせの信仰対象とみることで片付くが、どうもそれだけではなさそうだ。そこにはもつと深刻な、原始・古代社会の

コスモロジーが介在しているように思われる。環太平洋の文化を広くさぐることで、こうした問題へアプローチするために、目下は日本環太平洋学会の会員を募っている。

第十四回新島講座

一九九〇年度第十四回新島講座は、工学部の前進であるハリス理化学校が開校（一八九〇（明治二十三年九月二十六日）して丁度百周年に当たるため、その記念講演会も兼ねて行われた。

講師 江崎玲於奈博士

IBMフェロー（主任研究員）

日本アイ・ビー・エム株式会社取締役

〇セミナー

テーマ 私の研究遍歴：量子電子デバイス

十一月一日（木）午後三時三十分
於、同志社礼拝堂

〇講演会

テーマ The Significance of Scientific Progress

サイエンスの進歩が意味するもの

十一月二日（金）午後二時十五分

セミナー講演要旨

大学をでた当時は戦後で日本を復興させなくてはという気持ちで研究に取り組んだ。自分の業績はすべて企業で行ったものである。日本の企業では、真空管の研究そして、半導体の研究へと。そこに量子力学で取り扱わなくてはならない現象のトンネル現象の発見（これは最初の量子電子デバイスのエサキ・ダイオードとして知られている）となった。そして頭脳流出と言われて三十五歳の時にアメリカへ。IBMでは量子電子デバイスの研究を進展させ半導体超格子を人工的に作って、共鳴トンネル効果を実現させた。分子線真空蒸着法（MBE法）という色々な分野の知識が必要な技術によって可能となった。電子デバイスは微細化されていくため、量子効果を考えて設計す

る必要がでてくる。ナノメートルスケールの科学が発展するであろう。科学の発展が我々のライフスタイルを変えていく。近代技術をいかに有効に使って行くかによるが、使うのは人間自身である事を強調された。

講演講演要旨

新島先生がアメリカへ渡られた時から、ほぼ一〇〇年後の一九六〇年にアメリカへ行った。新島先生が創造性に富む個人人間であった事で先生を尊敬する。ニューヨークランドにおける新島先生の紹介をされた前置きから、科学と宗教についてローマ法王との引見にもふれ、科学と自然、科学と技術の関係を話された。サイエンスは価値的所産で、知識を求めたいという所から発している。蟻とモンスターのたとえから科学の考え方を紹介、科学を三つのサイエンス即ちフィジカル・サイエンス、ライフ・サイエンス、ヒューマン・サイエンスに分類され、アメリカと日本での発展状況を分析された。ダーウィンの進化論によると自然環境に適応したものが残り進化してき

た。人間は産業を発展させてきたし、環境を制御できるようになってきた。動物のように受け身ではない。人間の今後の進化は、自分達に適した環境を作り出していく事ができる。もつとも適した環境を作った国民が残り、繁栄するであろうという新進化論を紹介され、我々の科学技術をいかに有効にもちいて人間が進化するかが問題であると結ばれた。

訂正

第九十号時報索引の二〇〇頁
西口幸は西口章雄の誤りでした訂正してお詫びいたします。